



ちょっとそこまで ～お散歩日和 (名言編)～



むずかしいことを尋ねるのは… オーデン



むずかしいことを尋ねるのは、やさしい。……W・H・オーデン

思わず笑ってしまう皮肉な言葉です。私なりに考えてみて一番の皮肉は、何と言っても「むずかしい」という言葉こそが「むずかしい」という点でしょう。

ところで、むずかしいことを聞いてくる人に、たまに遭遇することがあります。

「君、人生って何だと思うかね？」

とかがそれに当たります。そういう時、私は逆に質問をどんどんするようにしています。何でもよくて、こんな感じです。

「人生という言葉の意味ですか。それとも私の感想をお求めですか。」

すると、大体の人が自身でも聞きたいことの答えを理解していません。そのため、こうして質問を受けると弱点と醜態をさらけ出すことになりがちです。学生時代に、飲んだくれの屁理屈談議で相手を打ち負かすのによく使った手です。要するに、その種の人というのは、「むずかしい」言葉に酔っているだけなのです。

その典型が、訳の分からない横文字を流暢に使う人です。本人は賢く見せているつもりなのでしょうが、体に馴染んでいない分だけ滑稽に見えてしまいます。

ところで、巻頭の言葉からの連想で、井上ひさし氏の、「難しいことを易しく、易しいことを深く、深いことを愉快地に、愉快的なことを真面目に書くこと」

という名言を思い出します。ここまでくると、さらにブラッシュアップした趣きがあります。



むずかしいことをやさしく、やさしいことをむずかしく、むずかしいことをゆかいに、ゆかいなことをまじめに、まじめなことをまっすぐに、まっすぐなことをひかえめに、ひかえめなことをわくわくと、わくわくすることをさりげなく、さりげないことをはっきりと書くこと
井上ひさし

ところが驚いたことに、最近読んだ「夜中の電話 父・井上ひさし 最後の言葉」(井上麻矢著)に、この言葉に続きがあることが紹介されていました。驚きです。ちなみに著者は娘さんです。それによると、



「まじめなことをだらしなく、だらしないことをまっすぐに、まっすぐなことをひかえめに、ひかえめなことをわくわくと、わくわくすることをさりげなく、さりげないことをはっきりと」

ここまでくると深読みする必要はなく、単なる言葉遊びの類だろうと思ったら、この本によると、生前に井上ひさしの書斎の机の前には紐が吊ってあり、その紐に、彼の創作への基本姿勢として常時ずっと吊られていたそうです。だとすれば、結構重要視した言葉の群れということになります。

さらに、麻矢さんによれば、「物事には常に裏と表があり、その両方を網羅して物を見なくてはならない」との考えが井上ひさしの精神の根にあるのだと言いますから、哲学的でもあったことが窺えます。

改めて「難しいことを易しく」を肝に銘じなくてはと思います。

さて、冒頭のW・H・オーデンについてもう一言触れておきたいことがあります。それは、「見る前に跳べ」と題する、次の詩です。さて、この詩は前向きなのでしょうか。後ろ向きなのでしょうか。さまざまな解釈が成り立つ、不思議な味わいがあります。

危険の感覚が消え失せてはならない
たとえここからはどんなに緩やかに見えようと
君の行く道は短く険しいのだ
見たいなら見るがいい
でも君は跳ばなくては行けない

これは、大江健三郎の同名の短編集でも紹介されており、「壁ぎわまで歩いていくが、そこから尻尾をまいてひきかえす」という、鬱屈した主人公が跳び出したいのに跳べなくて、心にわだかまりを感じながら生きるという内容が、独自のフレーバーを醸し出しているのがとても面白いところです。でも、ストーリーとしては気持ち悪いものばかりであり、面白くも何となくなくて、全然お勧めできません。若かりし頃、粹がっていた時代にだけフィットした感覚です。当時は「難しいものを難しく」語るのが格好良いと錯覚していた時代です。



この詩を読みながら思い出したのは、「花を育てて40年」という農家の人の話です。

「上手に花を育てるにはどうしたらいいかって聞かれたらな、俺はこう答えることにしてるんだ。『とにかく育てられるところまで育ててみな』ってな。だけど、ほとんどの人は質問するだけで終わり。実際に自分で育ててみるなんて人は、まず、いないね。だけど、自分で育ててみなけりゃ、どうなのかなんて誰も分かりやしないのさ。」

春になると、あちらこちらでキンセンカの花が輝いています。この花を見るといつも思い出します。以前、この花の種まきをしたときのことです。驚いたことに、翌々日には芽を出してきたのです。

「へえ、今まで知らなかったけど、キンセンカって値段は安いし、花の時期も長いし、そのうえ、育てやすいとなったら無敵の植物だなあ。」

と感心して見ていました。ところが、その翌々日、ほとんどの芽がナメクジに食われて死滅していました。やってみて初めて分かったことです。やってみないと分からなかったことです。

(終)

